

先生は、毎回、レポートの提出を受講者に義務付けられた。講義の終了間際に上映されたスライド写真を素材として、死の原因と形態をまとめるのである。私たちは、死体が発見された状況の説明を聞きながら、探偵になったような気持ちで現場写真を見つめた。そして、A4版のレポート用紙に、死因は何か、自殺か他殺か事故死かを述べ、そのような判断を下した理由を書くのである。

すると、先生は、私たちのレポートを毎回丁寧に講評して下さいだったのである。優秀なレポートを紹介するとともに、悪文の典型のようなレポートや誤字・脱字まで、スライドで上映された。

教官が、教室で一方向的に話すという講義に慣れていた私たちにとって、このような応答のある講義は新鮮であった。自分の書いたレポートが、どのような評価を受けるかに胸をわくわくさせながら、熱心に講義を受けたものである。

今にして思えば、三百人近い学生のレポートを毎回読まれることは、大変な御苦労があったのではないと思われてならない。しかし、先生の御努力のおかげで、私たち受講生は、講義を受ける楽しさを満喫したのである。

「発心真実ならざれば正境に縁すれば功德なお多し」という言葉があるが、先生の講義は、この言葉がぴったりと当てはまるのではなからうか。先生は、死体の写真を見たいという好奇心から受講した学生に対して、文章の書き方から科学的な思考まで教えて下さったのである。

今年の十月から、一般教育の講義を担当する私にとっては、牧角先生の講義のスタイルは、お手本であり理想でもある。学生の知的関心呼び起こし、学ぶ楽しさ、考える喜びを伝えられる講義をとの思いを胸に秘めつつ、講義の準備に追われる今日この頃である。

心理学のイメージ

有馬道久

心理学の講義を初めて受ける時、学生諸君はどんな内容を予想し、そして期待しているのだろうか。

こんなことを考えていて、ふと自分自身の入学の時を思い出した。4月初めのオリエンテーションの時だったか、ある先生が、心理学の専攻動機を話すよう言われた。学生番号順ということで最初に指名された私は、正直なところ心理学にどんな領域があ

るのかほとんど知らなかったし、具体的な動機などないに等しかったので、あわてて受験科目が合っていたのでと的はずれな答をして失笑をかってしまった。その後の人はというと、フロイトの著作を読んで、人間の無意識について興味を持ったのでとか、福祉関係の仕事に就きたいからなどと、それらしい答えをしている人もいる。学生番号がもっと後であれば、少しは気のきい

たことを言えたのにも思いながらも、これは大変なところに入ってしまったというのが、その時の正直な感想だった。

あれから10数年、いまだに心理学を続けているのだから水が合っていたのかもしれない。

ところで、現在私は、実験や検査の実習は別とすれば、講義というものを担当していない。どんな内容をどのように講義すればよいのか、これからの課題である。そこで、自分の学生時代のことは棚にあげて、冒頭の疑問を直接聞いてみることにした。答えてくれたのが心理学の専攻生で、しかも40名という人数では、全体の傾向といえるかどうかかわからないが、結果は次のようなものであった。

まず最初に、「大学に入学するまで、心理学とはどんなものだと思っていましたか」と回想的にたずねた。すると、「人の心の動きを読み取るものだと思っていた」という回答が最も多く、40名中20名、ちょうど50%に達している。ある程度予想された結果ではあるが、この答はいったいどこから出てくるのだろうか。世の中には、何々の心理という文字がよく目につく。そう言っただけでなにかしら法則らしいものがあるような気がしてくる。試しに何冊かの雑誌や本を手にとってみると、いくつかの類型が出され、それぞれの性格特徴が書いてあったりする。だが、どうしてそうなるのかについて書かれているものは少ない。おそらくこの何かよくわからないが人の性格を見分けるものがあるのだろうという気持が、人の心を読み取るという答に結び付くのもかもしれない。ある本によると、教養課程における心理学の授業の力点の1つは、心理学に対するあやまったイメージ・偏

見・過大な期待を除去することであるという。そのためには、いわゆる通俗心理学のように結論だけを呈示するのではなく、それが得られる過程—研究の方法—を大事にしなければならぬということになるだろうか。

次に多かったのが、「心理状態や行動様式を研究、分類するもの」(33%)、「心理テストなどによる性格判断」(18%)などであった。この辺になるとかなり実際の心理学の内容に近くなってくる。しかし、やはり人の性格に関連するものというイメージが強いようである。ひとつには自分自身の性格や他人からの評価が気になるという青年期の特色が反映されているのかもしれない。

では、実際に心理学の講義を受けた感想はどうだっただろう。併せて聞いてみた。最も多かったのは、「範囲が広い」(30%)という感想だった。授業では、おそらく性格だけではなく、歴史・研究法・知覚・学習・思考・社会的行動……と多くの分野が取り上げられただろう。この範囲の広さを視野が広がったと受けとる人もいるが、逆にとまどったとか掴みどころがないと感じた人もいる。1人の人間をいろんな側面からみる心理学のやり方は、ある意味で確かに掴みどころがないといえるかもしれない。他の感想としては、「科学的」(20%)というのがあった。アプローチの仕方が、分析か、それとも数値が多いことなのか、書かれていることからだけではわかりにくい、いずれにしても回答の中にあつた「科学的という言葉から最もかけ離れている学問」という予想とは違っていたようだ。

過程を大切にしながら、かつ広範囲のことを伝える。限られた時間の中で、この2つを満足するのはかなり難しいことだと

感じつつ、そして、人の心が読みとれるなんてそうできるもんじゃないとわかった時

のあてのはずれた顔を思い浮かべながら回答を読ませてもらった。

再 帰 的 授 業

小 松 伸 一

本学に赴任して1年半。現在、一般教育の心理学と教職科目の教育実践演習を担当している。教育学部の教育実践研究指導センターに所属し、とりわけ教育実践演習の中では「授業」についての授業を行う。経験不足の新米教師ゆえ、とまどうこと、反省させられることも多い。1年半、講義をしてみて感じたことを、以下に書き連ねてみる。

鏡。コクトーの映画「オルフェ」の中で、黄泉の女王マリア・カザルスは、鏡を通じて黄泉の国と現世を行き来していた（その冷冽な美しさが印象的だった）。黒手袋をはめた手を鏡にかざすと、風を受けた湖面のように鏡の表面が揺らぎ始め、黄泉の国への通路が開ける。詩人の目にも鏡は、現世のものとは思えない魔訶不思議な存在に映ったのかもしれない。この鏡に鏡を映してみる。つまり、2枚の鏡を向い合わせに置く。すると、鏡の中に鏡が映り、その映された鏡の中に鏡が映り、その映された鏡の中に鏡が映り、……。あるいは、ミルク缶の記憶。そのミルク缶には少女が描かれていた。その少女はミルク缶を胸に抱えていて、その抱えられているミルク缶には少女が描かれていて、その少女はミルク缶を抱えていて、その抱えられているミルク缶には少女が描かれていて、……。

エピメニデスのパラドックス。たとえば、

この枠内に書かれていることは誤り

という命題。これは真か偽か。とりあえず、この命題が真であると仮定してみる。「この枠内に書かれていることは誤り」という命題をPと置くと、この命題は「Pは誤り」と表現できる。「Pは誤り」が真であるということは、最初の仮定「Pは真」であることと矛盾してしまう。では、偽であると仮定した場合。「Pは誤り」が誤り（偽）であるということは、「Pは真」を意味する。この場合も、「Pは偽」という最初の仮定と矛盾を引き起こす。

$n!$ を求めるコンピュータ・プログラムを作る。 $n!$ は、 $n=0$ の時1であり、 $n>0$ の時 $n(n-1)!$ と定義される。LISPという言葉を用いて、これをプログラムしてみる。

```
(defun factorial (n)
  (cond ((zerop n) 1)
        (t (times n
                   (factorial (sub1 n))))))
```

ある関数 (factorial (n)) を定義する際、定義の中でその関数を呼び出す。これ